

## ヴァレリーあるいは「石の女」 : 『ネエールへの手紙』をめぐる一考察

松田, 浩則  
神戸大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/6632411>

---

出版情報 : Stella. 41, pp.141-168, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



# ヴァレリーあるいは「石の女」\*

——『ネエールへの手紙』をめぐる一考察——

松 田 浩 則

ルネ・ヴォーティエ（1898-1991）といえば、1931年にヴァレリーの胸像を制作したばかりでなく、ヴァレリーの対話篇『固定観念』（1932）の中心概念となっている「錯綜体 (l'implexe)」や「唯一のもの (l'unique objet)」などの発想源にいた女性として、以前からその名前は知られていたものの、彼女に関する一次資料がほとんど公表されてこなかったため、長きにわたって謎に包まれた人物にとどまっていた。そうした意味で、ミシェル・ジャルティがルネの娘でロジェ・ニミエの未亡人ナディーヌのもとで探り当て、2017年に公刊した書簡集『ネエールへの手紙（1925-1938年）』は、とりわけヴァレリーの情動史の欠落部分を埋める上できわめて貴重な資料体となっている。ここに収録された160通の手紙は残念ながらすべてヴァレリーからルネに宛てたもので、往復書簡集ではないが、ヴァレリーの『カイエ』などとの並行した読みを通して、ロヴィラ夫人、カトリーヌ・ボッジに続くヴァレリーの3番目のエロスの劇のありようを素描してみたい。

## 胸像あるいは怪物の制作

ヴァレリーは翌々日に控えた講演会のために、1925年5月26日、ルアーヴルの駅に到着する。駅で彼を出迎え、フェリックス・フォール通り48番地の自宅に案内したが、この港町でコーヒーや綿や胡椒を輸入する会社を営んでいたエドガール・ラウル＝デュヴァルの夫人で彫刻家のルネ・ヴォーティエであった。夫妻は町の高台に建てられた別荘群の建ち並ぶ一画に住み、そのダイニング・ルームにはフジタの絵が何枚か飾られていたという。翌朝、「英国風の寝室」でめざめたヴァレリーは「フリゲート艦のような重々しい匂いや古い木材」の匂いを嗅ぎつけたことを『カイエ』に記している。遠くから聞こえてくるサイレンの音や鳥たちの鳴き声を聞きながら、寝室に漂うさまざまな匂いに

とらえられたヴァレリーは、それを「どう表現していいかわからない」と書く。「湿って汚れたタオルの匂いだろうか、寝息のせいで重くなった寝室の匂い」だろうか、それとも「クレオソート」<sup>1)</sup> だろうか。ヨーロッパの各地を講演して回る生活は1922年以来続いていたが、そんな彼にしばしば起こったように、ここルアーヴルでも、旅先の知らない寝室の中にいるということ自体が彼をいつもより神経質にしている。そうした匂いがラウル＝デュヴァルの別荘に特有のものだったのか、港町特有のものだったのかどうかは記されていないので特定はできないが、その後、ヴァレリーは突風の吹く中、海辺を歩いて、海水がしぶきとなって植物に降り注ぐさまを見たり、市内を散歩したりしたようである。しかし、肝心のルネに関する記述はいっさいない。この初対面のとき、ヴァレリーはカトリーヌ・ポッジ（1882-1934）との初対面のときのように、豊かな黒髪をたたえた端正な顔立ちの、まだ幼さをどこかに残したような27歳のルネに一目惚れすることはなかったのだろうか。ミシェル・ジャルティは、ヴァレリーがまだ「カトリーヌに没頭しすぎていたので、ラウル＝デュヴァル夫人の彫刻家としての側面以外に関心を抱く余裕などなかった」<sup>2)</sup> と書いているが、ほんとうだろうか。それはともかく、ヴァレリーからルネへの第1信は、初対面後、半年以上もたった25年末のことである。そこには、ルネの母親とその再婚相手、結核治療の大家であったレオン・ベルナル教授を気遣う言葉とともに、忙しすぎて、胸像制作のためにルネのアトリエにポーズを取りにいく時間がみつからないという釈明の言葉が書かれている――

いつポーズのための時間が取れるかという件ですが、残念ながら、今日から来年1月4日まで私のスケジュールはぎっしり埋まっています、1日に2つの予定が入っているといってもいいくらいです！今の私には、あなたが想像もつかないくらい、時間がありません。オランダへの講演旅行から帰ってきて以来、正気の沙汰ではありません！ [LN, 23]

この手紙の口調は明らかに、半年間なんの交渉もなかった女性相手に書くものではない。手紙ではないかたちで、あるいは失われてしまった手紙で、あるいは第3者を通して、この間、なんらかの接触がふたりの間にはあったと想像すべきだと思われる。そうした接触を通じて、ルネによる胸像制作のためにヴァレリーがポーズをとるという取り決めがなされたと推定される。ジャルティは、

初対面の後、まもなくふたりはパリで再会したと推測しているが、それはこうしたことを考慮してのものだろう。ただ、再会后、胸像制作が実際に始まったにしても、どの程度まで進捗したのか、その痕跡をたどることを可能とする資料はない。そのため、ヴァレリーとルネとの関係はいったん途切れてしまったとジャルティは考えているようである。

その後ヴァレリーがルネと会ったことが確認できるのは1931年1月5日のことである。初対面から5年以上の歳月が流れている。この間、1928年1月、ヴァレリーはカトリーヌと決別していた。同じようにこの間、ルネはあるアメリカ人男性と熱烈な恋におち、夫に離婚を要求するが断られる。ルネが夫の同意を得るのに手間取っている間、当のアメリカ人はルネのもとを去っていった。しかし、ルネの離婚の意志は固く、子どもとともにルアーヴルの家を出てパリに住むようになる。ということで、1931年1月5日にヴァレリーがルネのアトリエで彼女にしばらくぶりに会ったとき、彼女は離婚調停中であった。何度かのポーズを取っているうちに、ヴァレリーが急速にルネに心を奪われていったさまが手紙から確認できる。1931年4月28日に書かれた第3信には次のようにある――

親愛なる友

4時以降、何度かお電話しましたが、彫刻家の声を聞くことはかないませんでした。それに私の胸像は返事さえしませんでした。今日の午後、私はたくさん時間ができたのです、というのも、なにかもかもが予定以上に早く片付いたからです。

ということで、その空き時間をポーズにあてようと思ったわけですが、かないませんでしたので、残念な思いをしています。少しばかり不安になるほど残念です。なにかいやなことがあなたの身に起こったのではないかと心配しています。私はまた、もし今日ポーズが取れないとすると、近々また旅に出る予定ですので、ますますポーズが取れなくなるだろうとも考えています。彫刻は私にとって貴重なものになりました。

あなたの粘土

ポール・ヴァレリー [LN, 25]

たまたま仕事が早く終わったのでポーズを取る時間ができたことを知らせようとルネに電話をしたものの、連絡が取れなかったことを嘆く文面である。ヴァレリーはアトリエに鳴り響く呼び出し音と制作途中の自らの胸像を思い浮かべながら受話器を何度か置いたのだろうか。いずれにせよ、長時間ポーズを取る

という苦痛を伴うはずの作業が喜びをもたらす時間に変わっていることに気づかされる。ヴァレリーはこの手紙を街中のポストではなく、わざわざフォブール・サントノレ 166 番地のルネの自宅まで行って郵便受けに投函している。ひょっとしたらルネに会えるかもしれないという期待があったのだろうか。しかし、まだこの段階で、ヴァレリーがルネに自分の想いを伝えることはない。ヴァレリーがその想いをルネ宛ての手紙ではじめてほのめかしたのは、1931 年 9 月初旬に書かれたと思われる第 6 信である——

マダム、

私はあなたのことを\_\_\_\_\_, しかし私は自分が思っている語を綴りません。  
なぜなら適切な語が存在しないからです！  
御足元にひれ伏します

A.

---

追伸 一般大衆なら、ここで「愛しています」(Aimer)と書くところですね。[LN, 27]

署名の A をジャルティのようにヴァレリーの洗札名のひとつアンブロワーズと考えることはもちろん可能だが<sup>3)</sup>、青年期に書かれた友人宛の手紙を除けば、ヴァレリーが Ambroise と署名することはそう多くはない。とすれば、Ambroise の可能性を残しつつも、第 3 信でヴァレリーが自分のことを「あなたの粘土」(Votre argile)と呼んでいたことを考慮すれば、この A もまた Argile、つまり「粘土」だと考えることもできそうである。さらにこの A は、ヴァレリーが 1925 年に入会したアカデミー・フランセーズの会員、つまり Académicien のことを含意しているのかもしれない(ヴァレリーは第 7 信で自分のことを、アカデミー・フランセーズ会員を示す「不滅の人 (l'immortel)」[LN, 28]と呼んでいる)。そしてもちろん、Aimer の語を排除するそぶりを見せつつ、Amoureux と言いたかったのかもしれない。いずれにせよ、ヴァレリーとしては、ルネの足元にひれ伏す粘土あるいはアカデミー・フランセーズ会員といういささか自虐的な姿を提示しつつ、そんな自分は「一般大衆」が「愛しています」などという卑賤な言葉で満足しているようなありふれた感情であなたのことをお慕い申し上げているのではありません、という自負のようなものを伝えようとしているのかもしれない。自虐と自負の両方をこめた A、このような些細とも思われる言葉遣いの中にヴァレリーが手紙を書く上での戦略が透

けて見えてくる。

その数日後の9月10日、ヴァレリーは夜行列車に乗り、パリから南仏の保養地ヴァール県アゲ近くのマ・カン・ロンに向かう。パリ在住の医者で友人のルイ・ブルと妻のヴェラに当地で合流し、21日までいっしょに過ごす。第7信は、10日の夕方から翌朝にかけて書かれたと思われるが、冒頭近くで、「私はもうヴィルヌーヴ＝サン＝ジョルジュにいます、つまり青と薄黄色の天国から無限に離れたところにいます」[LN, 28]と、「天国」のようなルネのアトリエから遠く離れてしまったと嘆いてみせる。しかし、ヴィルヌーヴ＝サン＝ジョルジュはヴァル＝ド＝マルヌ県の小都市で、パリからわずか16キロほどしか離れてはおらず、かなり誇張した言い方であることにはまちがいない。こうした言い方をルネに弁解しようとしてもしたのだろうか、ヴァレリーは初めて自分が気分の変わりやすい人間であることを明かす――

カバンの中を探してみたら、このデンマークの便箋を見つけたので<sup>4)</sup>、この馬鹿でかくてがたがた揺れる列車の中で、幼い子どものような字を書いているというしだいです。

結局のところ、この文字は、あなたをおそらく、その状態や気分の変動のせいでかなり驚かせたにちがいない人間が書いています。

私の中には自分でも真正面から見つめることのできない瞬間があります。心が私を苦しめるのです。そんなとき、存在は極端なものだけに還元され――もはや笑いと涙しなくなります。存在は笑いを断ち切り、涙を抑えつけます。

列車の揺れと文字のゆがみ、不安定な自分の気分などが一体となった手紙は、その後半、一転して戯画的な会話に変わる――

――よろしいですか。私は自分が線路の設備に優しく微笑みかけている最中だったと突然気づいたのです……。

――親愛なるポールさん、あなたのお馬鹿ぶりは度が過ぎています。

――“しつづいいたしました”，「精神」様。

――V（ヴォーティエ）奥様二間抜ケナコトハ書カナイデクダサイマセ。奥様ハアナタノ馬鹿ゲテ退屈ナオ振舞ニトテモシヨックラ受ケテオイデデス。アナタ様ハ少シバカリ気ガチガッテオラレルヨウデスネ。道路沿イノ電信線ニ悲シク微笑ミカケルナンテ、イッタイドウイウオツモリデショウカ。[LN, 29]

最後の科白はルネの家政婦の発言と想定されているのだろうが、不器用な英語

で書かれている。それにしても、このやり取り全体はどういうことなのだろうか。極端から極端へと移りやすい自らの不安定な気分をあえて手紙の文面で実演して見せたということだろうか。そしてこうした気分を引き起こした原因がルネであることを伝えようとしたのだろうか。

ここで、少しばかり時計の針を戻す必要がある。というのも、アゲに向かう列車に乗る2日前の9月8日、ヴァレリーは自らの心境を次のように『カイエ』に書いていたのである――

この現象を簡単に説明するならば、人間は<sup>※</sup>みじめな存在だということ。肉体の復活に関する純粹自我あるいは自我ゼロの理論。ところでこの命題はきわめて抽象的ではあるが、今のような混乱と神経の時期には――つまり、この秋の刺すように鋭い天気、緊張状態あるいはもっとも優しくもっとも鋭い感情の上での錯乱状態をかかえた時期には、私には自然なものに思われるし、自然なものとして現れる。<sup>5)</sup>

冒頭の「この現象」とは、ルネのおかげで自分が追い込まれ、「緊張状態」に置かれ、「錯乱状態」まで起きているということだろう。そして、そんな自分としては、自己防衛をするために自らが青年期から練り上げてきた「純粹自我」の理論、つまり、感情の嵐も傷みもいっさい感じることのない自我の理論にすぎないし、それがごく当然のように思われるということだろうか。もちろん、そのような理論がほとんど何の助けにもならないことは、ヴァレリー自身が一番知っていることでもあるのだが。ところで、「肉体の復活」は原文では *Résurr. des Corps* とある。*Résurr.* は *Résurrection* の略であるが、この中で「再生」を語源的な意味としてもっている *Renée* がほのめかされていることを見落としてはならないだろう。つまり、この「肉体の復活」とは、イエスやラザロにおけるような意味での死後の「肉体の復活」なのではなく、端的にエロスの復活、さらに言えば、エロスに翻弄されかねない肉体の回帰ということなのである。なお、ヴァレリーはこの時期に書かれた『カイエ』で1931年秋のパリの天候不順に何度か言及している。実際この年の8月には大雨が続き、パリの街がいたるところで浸水したり、9月は例年より平均気温が3度ほど低かったりしたというような気象データが残されているが、いずれにせよ、そうした異常気象がルネとのかなわぬ恋の中で刺すような痛みとして感じられたというのである。

ヴァレリーがルネのアナグラムにあたる NÈÈRE (ネエール) の文字を『カイエ』に初めて書いたのは、その翌日の9日のことである。そして同じ9日に書かれたと思われる『カイエ』の別のページには次のようにあった——

エロス——NR——9月

またお前か。不思議なめぐりあわせだ。存在の精妙な振じれと緊張。奇妙な嫉妬、酩酊、エネルギー、偶像崇拜、優しさと意図。——「創造」なのだ——要するに。抒情的悲劇——ある「オブジェ」が《原因》であると同時に《結果》でもある「状態」——モデルとイメージ——《暗黒体》(Corps Noir)。それは吸収したものを放射する。〔…〕

私はこうしたことを口ごもりながら語る。しかし、この領域には見出されるべき何ごとかがある、そこには、「未知なる——自己」のもっとも美しい発明、生命と苦悩とのダイヤモンド——それが見出されるのだ。そこに見出されるのは、「任意なるもの」の「創造」および任意なるものの力——そして要するに「詩」——つまり「反響により無限の力をもつにいたるものの形成」——をもっともよく感じさせるものなのである——！

こういうことに、実に傷つきやすい人間、——秋や例年より早くやってきた寒さや存在の収縮がそれにたいして私を傷つきやすい存在にしている。(形象化されないさまざまな思い出がそれに加わる——それはいろいろな状態の思い出だ。)

いわば「曖昧なもの」の熱狂と、精神の鋭さをもってなされる戦いのようなもの。言葉に挑んでいるこうしたすべて。<sup>6)</sup>

「エロス——NR——9月」(NRはNÈÈREの略語)というヴァレリーの頭を占有する3つのテーマが、あたかも三題漸のように提示された後、「またお前か」(Te revoici)という一文が来ている。「お前」(te)がだれかは明示されていない。しかし、前日8日の『カイエ』の1ページを見た私たちには、その「お前」が、復活した肉体であり、復活したエロスであり、そのエロスに翻弄されかねない自分を指していると推定してまちがいないように思われる。さらに、revoiciのreにせよ、Résurr. des CorpsのRéにせよ、RenéeのReにせよ、「反復・繰り返し」を示す接頭辞の偏執的なまでの登場は何を意味しているのだろうか。「曖昧なもの」の熱狂と「精神の鋭さ」との闘い、つまりはヴァレリーにとって終生のテーマともいえる「エロス」と「ヌース」(知性)のふたりの天使の戦いが再開されたというだけでなく、あたかも、この戦いが今後もまた続いていくことを予感しているような書きぶりのようにも見えてくる。

つまり、「お馬鹿なことばかり」[LN, 30]の第7信は、このような苦悩に満ち

た『カイエ』での考察の直後に書かれたということになる。原則、手紙は恋人に宛てられたもの、『カイエ』は自分に向けられたものという区別があるにせよ、せいぜい2、3日の違いで書かれたこれらの書きものの調子の違いに驚かされないだろうか。と考えれば、第7信の後半に現れた軽妙な会話の部分は、エロスに押しつぶされようとしているヴァレリーの精一杯の抵抗であり演技だったのかもしれない。あるいは、ひょっとすると、この会話はヴァレリーがアゲでの休暇中に書きあげようとしていた『固定観念』で展開されることになる脱線と勘違いだらけの「医者」と「私」の対話の執筆の呼び水となるような働きをしたのかもしれない。

というのも、アゲに向かったヴァレリーは宿題を抱えていたのである。自ら医者で薬学博士でもあるアンリ・マルチネから、彼の名前がそのままついたマルチネ製薬会社が医師会員へのサービスの一環として未発表の文学作品を限定部数出版して配布しているので、そのための作品をなにか書いてほしいと要請されていたのである。もちろん、この種の仕事はヴァレリーの創作意欲をかきたてる類のものではなかったが、友人で医者 of アンリ・モンドールからの協力依頼もあり、しぶしぶ引き受けていた。ブル夫妻の別荘地で気乗りのしない仕事をしている自らの姿をヴァレリーは第8信で次のように伝えている――

私は私の「宿題」への序文にしようと、何と形容していいのかよくわからない漠然とした文の試みのようなものをなぐり書きしたところですよ。正直言いますと、精神はそんなものに集中することはできませんでした。とはいえ精神がどこにいたのかも、精神がどんな甘美なこと、あるいは苦しいまでに優しいことを、だれに向かって、少し離れたところで、心の底では嫌だと思いつつ、いろいろなことがあるにもかかわらず、形成したり作成したりしていたのかを言うことはできません。[LN, 30]

作品の序文を精神が集中できないまま書いたといいながら、精神が何に、だれに向かっていたのかは明かさない。愛情の表明の仕方としてはいささかまわりくどいようにも思われるが、この少し後で、ヴァレリーはルネのアトリエでポーズを取っていたときに感じた不思議な感覚に言及する――

あなたは今私の石膏を作っているのですか。私を石膏にしているのですか。私の頭から、あなたは何と多くのものを作ったのでしょうか、そして、今現在作っているのでしょうか、あるいは将来作ることができるのでしょうか！ 私は耳や、首……にあなたの粘

土のついた指を感じます。作品の首筋に触れられると、モデルの個人全体が震えるのです。なんとという悪魔的な芸術でしょう！　今や彫刻は私の目にはまったく新しく、まったく不安な気持ちにさせる光のもとで姿を現しています。あなたは柔らかい土の塊をこねているだけに思われますが、実は、あなたは別のことをしているのです。深いところを見ることのできる人があなたの仕事ぶりを見たなら、その人は、生きたものをこねあげて、隠れているものを造形しようとしているあなたを見ることでしょう。[LN, 31]

ルネは自分の制作中の作品に容易に満足せず、長時間ヴァレリーにポーズを取らせて疲労困憊させることもあった。しかしポーズの間、ヴァレリーは単に苦痛を耐え忍んでいたのではなく、ルネがときに鼻歌を歌ったり、小躍りしたり、作品に向かってほほほ笑いかける瞬間があるのを注意深くとらえていた。もちろんルネの関心はあくまでも作品にあるのであって、モデルのヴァレリーの肉体そのものにはない。しかし、粘土のついたルネの手が作品の首筋に触れると、ヴァレリーの肉体はあたかも自らが愛撫され、自分の中に「隠れているもの」をルネが引き出してくるのではないかという想いとらえられる。まさに彫刻は「悪魔的な芸術」であり、ルネは「女ピグマリオン (Pygmalionne)」[LN, 37] と呼ばれるに値するわけである。ヴァレリーの中でルネがネエールへと変身したと思われる9月9日、ヴァレリーはまさにポーズが「長スギル (Hora longissima)」<sup>7)</sup> と嘆きつつ、次のような断章を書いている。

植物や木の頂きが風に吹かれて楽しい思いをしたり、不安な気持ちにさせられたりする一方、幹や根は地面に固定され、しがみついている。そのように、海は自由な額を持っているが、圧力のかかったその深部は液体の大理石でできている。<sup>8)</sup>

ここには、海の「自由な額」という表面にせよ、「液体の大理石」という深部にせよ、執筆されようとしている『固定観念』で重要な役割を演じようとしているイメージ群がおそらくは未整理の状態で漂っているが<sup>9)</sup>、ヴァレリーはルネの手がいずれ堅固なはずの「液体の大理石」に鑿をふるい、そこからヴァレリーの胸像を掘り出してくることを身体的に予感していたのではないだろうか。

しかし、話はここで終わらない。というのも、長時間ルネの前でポーズをとりつつ、彼女の制作のようすを観察したヴァレリーは、自分が構想中の『固定観念』をルネを素材として、あるいは彼女との苦しい恋愛を出発点としつつ書き上げようとする。10月1日、作品が半分ほどできたことを伝えながら、ヴァ

レリーはルネに次のように書いていた――

仕事は今、「半分」のところまでできました。私は手当たり次第にタイプを打っています。こんなものを読まされる医者たちこそ――いい迷惑ですが！

とはいえ、書いたものを最初からやり直す必要があるでしょう。でも、1匹の怪物を、粘土の塊をひとつ持っているということは大変なことです。それは私にとってすべてといってもいいくらいです。怪物がほほしかるべき体重に達したならすぐパリに帰るつもりです。[LN, 36]

ヴァレリーが『固定観念』の草稿を「粘土の塊」と認識していることに注意しよう。ルネがその指で触れる粘土とは違ってヴァレリーの粘土は文字という粘土であることは言うまでもないが、それは「怪物」を生み出す粘土である。もちろん、その怪物性はルネそのひとのものではなく、彼女をきっかけとして怪物的な心性をいだくようになったヴァレリー本人のものであるにちがいない。いずれにしても、自らの胸像を作っているルネを見つめていたヴァレリーは、あたかも水鏡に映った自分の似姿を見つめつづけたナルシスのように、自分もまた文字という粘土でルネを表現しようとする。「魔術的な芸術」が生み出す胸像は完成し、10月末、パリのサロン・ドートンヌに出品された(図版1)。ヴァレリーが生み出そうとしていた「怪物」としての『固定観念』も無事完成し、翌年3月に出版される。

### 打ち明けるルネ

ルネによる胸像が好評を博し、『固定観念』の執筆も終わったヴァレリーは重荷をおろしたような気持ちになっていただろうか。互いに互いを作りあうといういわば「怪物」の競作はヴァレリーが理想とするような愛の共同体の実現を彼に垣間見せはしなかっただろうか。ともあれ、サロン・ドートンヌが開始される2週間ほど前の10月15日、ヴァレリーはルネから、ルネ・タッサン・ド・モンテギユ(1897-1994)という人物に心を奪われているという打ち明け話を聞かされていた。この人物はアンリ・タッサン・ド・モンテギユ伯爵の子息で、後にフランス石油会社の理事になる人物であるが、現代美術の愛好家でもあった。彼はさらに、ポンピドゥー・センター友の会の設立にも貢献し、フランス国立現代美術館友の会の理事も務めることになる。いずれにせよ、これまでルネにたいする愛情が受け入れられなくとも、かすかな期待を抱きつづけてきた

図版 1

ヴァレリーと胸像と  
ルネ・ヴォーティエ  
(撮影日時場所等不明)

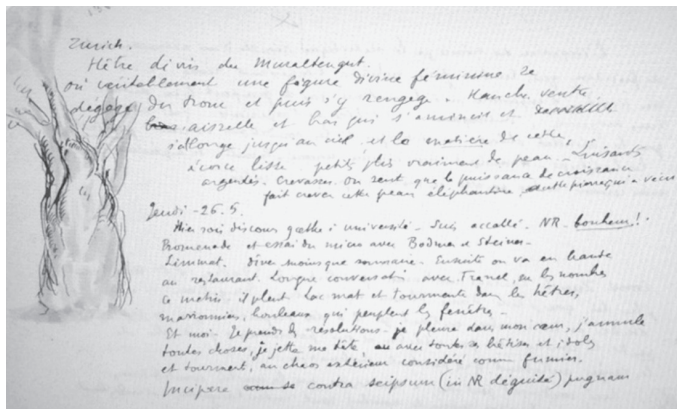


図版 2

(C. XV.556 /  
Cahier 145,  
145)

図版 3

(C. XV.644 /  
Cahier 146,  
65)



ヴァレリーの前に、自分よりもはるかに若い恋敵が出現したのである。ヴァレリーは10月30日に60歳の誕生日を迎えていたが、その日ヴァレリーは自らの3つの恋愛体験を列挙しつつ、次のように『カイエ』に書いていた——

Rov..a 事件

K事件とRV事件

激しい状態——自己暗示。

要するに病気、それを記述しなければならない。

感覚——器官的な。

情愛 (Tenezza), それが変わ質し、コロイド溶液のように凝集する。

衝撃——墜落。

頭のとっぺんで——頭痛 (dolor capitis) がするほど。<sup>10)</sup>

「Rov..a 事件」は1892年秋のいわゆる「ジェノヴァの夜」の原因となったロヴィアラ夫人へのヴァレリーの一方的な片思いのことであり、「K事件」は1928年に終息したカトリーヌ・ポッジとの恋愛のことであり、ルネとの恋愛が、それら先行する2つの「事件」(Affaire)と同じレベルとして列挙されるほど、のびきならない状況に立ちいたっているというのが、60歳のヴァレリーによる現状認識なのである。ヴァレリーはルネの打ち明け話があって2週間後の11月1日に書かれた第17信で、自分の心境を語っている——

——あなたが私に当然言うべきことを言ってから昨日で2週間になります。なんという打撃を私は受けたことでしょう！

何年も前から、私は殺された状態で生きる (vivre tué) ということがどんなことなのか分からないままでした。

でもこうなったからといって、もう2度とあなたにお会いしないという決断をすることはできませんでした。あなたにはとても親切にいただいていますので、それを考えると、私はもう自分の心が何もかも理解できなくなってしまうのです。[LN, 41]

これまでは「殺された状態」で生きてきたが、今回こそはとどめを刺されたということだろうか。しかし、そうは言いつつも、ヴァレリーはルネと別れる決心がつかないでいる。ところで、ヴァレリーはこの第17信では、近々雑誌に散文詩が出版されることを伝えている——

私のものではない親愛なるお方、私は私の仕事にもどります。——何ページか作品を作っているのです——おそらく——散文詩になるでしょう。それらを間もなく——

近日中にお届けします。[LN, 41]

ヴァレリーの言葉どおり、それらの詩は1932年1月号の『ラ・ルヴェ・ド・フランス』誌に「小抽象詩」の総題のもとで発表された。「Avant toute chose」「L'Unique」「Accueil du jour」「La Rentrée」の4篇である。これらのうち、後に散文詩集『アルファベ』の中に「R」という題で収録されることになる「La Rentrée」にふれておきたい。

夕刻、男と女が帰宅する。暖炉の火の前で、男は女をとらえている不安について語る――

ここではすべてが、甘さ、生暖かさ、賢明さ、確かさ。それでも私にはよく分かっている、あなたが自分の中で、私たちの人生のあらゆる敵の現前を感じ、推しはかっていることを。もはや存在しないもの、やがて存在するもの、これこそが2つの力のそれぞれだ。それゆえあなたは、物狂おしい炎の前で身を震わせる。あなたは弱々しく、ごこちなく、胸が締めつけられ、黙りこくり、幸福の幾多の形態のただなかで痛ましいありさまだ。

この上もない確実さで、私は知っている、人間のあらゆる恐怖、幼児たちのあらゆる恐怖、獣どものあらゆる恐怖さえもが、夕刻という時間のせいで、あなたのうちに宿っていることを。<sup>11)</sup>

リーヴル・ド・ポシュ版の『アルファベ』を編纂したジャルティによると、ヴァレリーは小さな厚紙に、「アルファベ。R。秋の分析。/ 典雅な悲しみの開始 / 恐怖による優しさ / ぞっとするような、鋭さゆえに甘美で / 深さゆえに致命的な優しさ / これらの優しい恐怖、人間という名もなき存在の感覚」<sup>12)</sup> などというメモを残しているという。ここに、先述した1931年秋の天候不順に悩まされながら、それを鋭い痛みと感じつつ、ルネとの不幸な愛を生きていたヴァレリーの姿を見ることは可能だろうか。しかし、ここで忘れてならないことは、ヴァレリーがこの詩を、まだカトリーヌ・ポッジと関係していた1924年から書いていたという点である。つまり、ヴァレリーは1920年秋に初めて訪れ、その後何度か滞在したベルジュラック近郊のポッジの父方の領地ラ・グローレで過ごした思い出を素材に、元来はポッジに宛てて書いていたはずの詩を、ポッジと別れた今、ルネのための詩として仕立て直そうとしているように思われる。もちろん、詩の原題 La Rentrée の中に Renée の名前が潜んでいるという点も考慮されなければならないだろう。これが、ささやかながら、「私のものではな

い」ルネへの目配せであることはまちがいない。

さらに、同年2月の『カイエ』には、次のようにある——

愛——ポリフェはネエールを見つめ、触れていた、「まるで、彼自ら彼女を構築しようとする行為のなかにあったかのように」。彼は彼女を自らの手による作品のように見ている。<sup>13)</sup>

ポリフェ (Polyphée) はポール (Paul) とオルフェウス (Orphée) とを組み合わせた名前でもヴァレリー自身のことを指すと思われるが、ヴァレリーはもはやルネを素材とする作品を書くだけでは飽き足らず、ルネそのものを自らの手で作り上げようとまでしている。まさにピグマリオンである。もちろん、このような詩篇がどれほどルネの心に響いたかどうかは分からない。いずれにしても、ルネが別の男性を愛していると明言している以上、ヴァレリーのできることは限られていたはずである。ルネへの愛を断念するか、ルネとの距離をとりつつ、年長者として父親のようにルネをあたたく見守っていくか……。ヴァレリーは文字通り、その知性のかぎりをつくして対応策を考えるのではあるが、ルネへの想いはなかなか断ち切れない。

11月11日の第18信には、自分の想いを自制しようとするヴァレリーの姿が見られる——

今夜は、書いても無駄なことは書かないようにします。

わがムッシュ彫刻師さん、結局のところ、石のようでないといけないのですね！私は、多くの人が私はこういう人物だと思っているような人物になりたいと思います。あなたを創造するという責め苦から逃れ、無限にあなたを廃棄したいと思います。  
[LN, 42]

ルネを「ムッシュ」と男性扱いしつつ、変幻自在の形を取りうる「粘土」ではなく「石」のように硬くて、感情を理解しない人になりたいというヴァレリーの決意には、「石」のように自分の想いを理解してくれないルネへの軽いあてつけもこめられているのだろう。しかし、その8日後に書かれた第19信は、すでにヴァレリーの決意が揺らいでいることが見てとれる——

私は馬鹿みたいに無限に待ちつづけるという残酷な一夜を過ごしました。馬鹿げていることは知っていますが、だからといって無限に待つことをやめるわけではありません。だれかに、あるいは睡眠に、あるいはすべてに、あるいは無に向かって呼びかけ

るということ以上に奇妙で、かつ苦痛をとまなうものはありません。

私は明日という日を恐怖の目で見ています。おかげで私の頭は疲労困憊してしまいました。この疲労と死んでしまったもろもろの考えでできたカオスの中には、命に命を吹き込んでくれそうな希望の実質の粒も芽も最小限のかけらさえもありません。  
[LN, 42]

11月7日の土曜日に書かれたと推定される第20信では、今しがたルネと会って別れてきたばかりのヴァレリーが、その直後に手紙を書かずにはいられないと弁解しつつペンを取っている――

存在し、かつ不在の親愛なるお方、私はあなたに手紙を書かなければなりません。といいますのも、さっきあなたと別れたばかりなのですが、私はかつてなかったほどにあなたに捉えられ、そんなことが可能だとして、先ほど以上にお馬鹿になってしまったのです！ あなたは私のアパートマンからほぼ直線で300メートルのところに住んでいます。近すぎます。それが私を苦しめるのです。私は自分でも抑えきれないのです――少しばかり苦しむのを。[LN, 43]

ここまで一気に書いたヴァレリーは、次の段落で調子をがらりと変えて、ルネに何を期待していたのかを語る――

しかしながら、人間というものはあまりにも間抜けなので、心ならずも、自分の存在のすべてを使って愛の「すべて」に加護を祈ることしかできません――あるいは、少なくとも、「すべて」だと彼が信じているものに。――それは一体になりたいという狂気のようなものです。一般大衆はそれを快樂などと呼んでいます！ こうした呼び名が私のもとを訪れたことは一度もありません。それを、得も言えない原始的な絶望や自分自身を贈与したり放棄しようとしたりする意志が入っているなんらかの極限的な感情から分離すること――それは下品なものですから。

ところで、この部分は同じ日に『カイエ』に書かれた劇作品『ストラトニケ』のためのメモの記述の一部とほぼ一致する。『ストラトニケ』は、ルネとの不幸な恋愛がきっかけでヴァレリーが執筆を再開した作品であるが、ヴァレリーはルネ宛の私信に、将来作品として発表する可能性のある作品の一部を、なんの説明もなしに使っているということになる。これまでヴァレリーはこうした私的領域の書きものと公的領域の書きものとの閼を意図的に侵犯したことはなかったはずである<sup>14)</sup>。この部分は、『ストラトニケ』では、父でシリア王のセレウコス1世と再婚した若い母ストラトニケへの愛に苦しむ王子アンティオコ

スが医者を相手に自分の病を語る「アンティオコスの独白」の場面である。つまり、ヴァレリーとルネとの関係が、アンティオコスと医者との関係へと置き換えられている。ヴァレリーの病を引き起こした当のルネが医者としての役割を演じることは、考えてみれば奇妙なねじれとも思われるが、第20信が、「さまざまな観念を形成し、魂のすみかを整え、時間を瞬間と分離し、感情を欲望と分割し、可能を不可能と分割し、——私と私を分割し、あなたがなり得るものとなり得ないものを分割」しようと、いくらルネへの想いを断ち切ろうと理性が努力しても、それは「一瞬しか続かない」[LN, 44]とルネに向かって嘆くところで終わっているのに対し、『カイエ』のほうは、同じ理性の努力を語りつつも、より悲壯感に満ちた終わり方となっている——

だが理性の試みは……心臓が一回鼓動する間しか続かない。私は突き刺されている、突き刺されている。私はもう自分などいらない。自分で自分を苦しめ、自分自身を執拗に攻撃し、自分で自分を食い尽くす、等々…とはいったいどういうことなのか。おお、医者よ、私に毒を注げ！<sup>15)</sup>

ヴァレリーはこのようにルネが別の男性に心を寄せていると知ってもなお、ルネを断念することはできない。ヴァレリーはルネに書く手紙の数を減らそうとしたり、会う回数を減らそうとしたりしたようである。ルネのほうも、ヴァレリーを遠ざけようとしていたのか、1932年2月には、ヴァレリーが電話をしてもうまくつながらないと嘆くような場面が続く。そんなある日、ルネ・タッサン・ド・モンテギユとの関係がうまくいっていないことに絶望して、命を絶とうとまで考えたことを伝えるルネからの手紙が届く。2度目の重要な打ち明け話である。22日、ルネとの不幸な愛のせいで、同じ絶望を味わわされているヴァレリーは、恋敵との愛に悩むルネに心からの理解を示す——

親愛なる人、あなたの手紙を読んで泣いてしまいました。あなたは今までこれほどまでに優しい友愛のレベルを越えたようなことはいっさい私に話してくれたことはありませんでしたから。あなたの悲しい打ち明け話は、たしかに聞いていて私にはとてもつらいものですが、——私があなただけのことをどれほど強く感じ取って、たえず私の思考の中であなたと対話をしているかということをおあなたが理解してくれたという証拠でもあるのです。あなたの苦しみは私にとって2倍の残酷さです——けれども、そのせいであなたのことを愛しています。ほんとうに、苦しむ人間どうしというのは、他の人間たちよりも互いを理解しあうものですね。

私は鉛筆書きのあなたの手紙を6回も10回も読み直しました。

私はあなたがすべてのものに……決着をつけようと考えたと書いてあるのを読んで震えあがりました。友よ、それは恐ろしいことです。私は人がそうした状態にまで追い込まれるためには、何を感じ、何が必要なのかを知っています。それほどまで愛しているのに愛されないなどということが、どうして可能なのでしょうか。私はこの命取りの問いを魂の中に抱きつづけています。[LN, 33]

「苦しむ人間どうしというのは、他の人間たちよりも互いを理解しあうものですね」とヴァレリーは書くが、なんとも皮肉なものである。ヴァレリーではない別の男性との仲がうまくいかないといって悩んでいるルネにヴァレリーはいったいどんな声をかけることができるのだろうか。まさにふたりの間を結びつけているのは苦しみのなかでの共感ではあるのだろうか。しかし、この共感からふたりの間で共有されるような愛が生まれてくる可能性はありそうにない。

だが、ここで、ちょっとした事件が起きる。23日、ルネが予告なしにヴィルジュスト通りのヴァレリー宅を訪れたのである。ヴァレリーの手紙を読んでルネが感激したのか、緊急に口頭で伝えたいことでもあったのかどうかは分からないが、ヴァレリーは大喜びする。そして、その喜びを3篇の詩で表現し、翌日の第49信で送る。そのうちの1篇はそのまま「訪問」と題されているが、そこにはルネの来訪のもたらした喜びとともに、ふたりの愛的確かな分析もまた歌いこまれている――

#### 訪 問

不意に現れた、清らかで、鮮明で、繊細で、深刻そうな  
 魅惑的な額をもつ偶像が、「唯一の」偶像が  
 両の目に得も言えない唯一なもの  
 (それに私の心を砕く内密な心配事)を抱えて  
 突然、私に近づき、私の無秩序そのものの中に座った。  
 バラ色と漆黒の偶像はそこにいた、すぐそばに、  
 まるで、奇跡によってその全身が私のものになったかのように。  
 彼女はそこに来た、そこにいた、その生とともにいた、  
 いつものように、空しい観念としてではなく……。  
 彼女はそこにいた、自分を引き裂くものしか見ることのない  
 男のいつものカオスの中に；  
 彼女はそこに来た、しかも、不幸な愛は  
 希望のない魔法使いの洞窟の中に住んでいた。

豊かで厳しい冬の低い太陽の  
 強力で赤く染まった陽光が黄金色に照らしていた  
 どんな秘密を宿しているのか私の怖れる魅惑的な額を、  
 そして清らかな空は窓ガラスの黄金の中で眠っていた。  
 おお、あまりにも愛しい、あまりにも「あなた」、おお、「お前」ではない「あなた」……。  
 愛のせいで私と同じくらい悲しい思いをしているあなた、  
 あなたはそこにいる、おお、私の愛にたいして閉じられた生よ、  
 あなたは私の声を聞き、私はあなたの声を聞く、  
 私は賞賛するあなたのその手を取り、  
 私は大好きな、けれどキスをこばむその唇を見る、  
 私の眠りを刺し貫く闇のような目を見る、  
 そしてその魅惑的な体を見る。  
 不眠の私はその体が眠っているさまを想像し、起こさぬよう気をつけながら、  
 寝息を聞いてみたい、夢から守ってあげたい、  
 敬虔な気持ちで愛して、指にキスしたい、  
 髪や平和そうなまぶたに触れてみたい、  
 静けさの中、優しさゆえに気も狂わんばかりになりたいと願う […]。  
 ——そして私たちはお互いの中に似通った心があるのを感じていた、  
 私たちは互いに近いところにいた、  
 しかし私たちの間には深淵があった……。[LN, 72-73]

(エストニア語からの翻訳<sup>16)</sup>)

書類や本が雑然と積み重ねられたヴァレリーの書齋に何の前触れもなく現れたルネは、まさにフローベールがその『感情教育』の冒頭で描いたようなアルヌー夫人の「出現」の場面そのものである。「カオス」の中に住む「希望のない魔法使い」の前に姿を現した「清らかで、鮮明で、繊細で、深刻そうな」「魅惑的な額をもつ偶像」は、このとき「空しい観念」ではなく、肉をそなえ、「その全身が私のものになったかのように」感じられたのである。まさにそれは、「ふたりして不幸であることの幸福」[LN, 74] が実現した瞬間である。もちろん、それ自体、一瞬の幻想にすぎず、ふたりの間に「深淵」が横たわっていることをヴァレリーはだれよりも深く認識している。

このような心の交流に気分をよくしたせいなのか、ヴァレリーは28日の日曜日、再び姿を現したルネに『固定観念』の序文を読んできかせる。しかし、「私は激しい苦痛の虜となっていた。いくつかのきわめて活発できわめて鋭い思考のため、それ以外の私の精神と私の世界のいっさいが破壊されていた。何かが

私の気持ちを紛らわせることがあっても、私はそのたびごとに、さらに狂おしくなって私の苦しみへと舞い戻ってくるのであった」<sup>17)</sup> といった悲痛な調子で展開される序文を聞かされたルネは激しく動揺する。ヴァレリーの自らに対する想いを理解しつつもそれに応えられないことを詫げる気持ちがあったのか、あるいはヴァレリーが自らと同じ不幸な愛を自分のせいで生きていることを再確認したのか、ルネは嗚咽する。翌 29 日の第 52 信でヴァレリーは自らの行為を詫びている――

親愛なる人、私はあなたがここで涙を流し、泣きじゃくったのだと考え、そんなことをした自分を責めています。お赦してください。あなたがいらした場所を見つめながら、私は自分もまた涙を流しているのを感じています。私はあなたにあの抜粋を読んで聞かせるべきではなかったのです。[LN, 77]<sup>18)</sup>

そんな後悔をいだきながら、3月10日、ヴァレリーは長期の講演旅行に出発するが、彼を追いかけるように、ルネからの手紙がリヨンに届く。13日に書かれた第54信はカールトン・ホテルのヘッドレターが入った便箋に書かれている――

私はこの地の青ざめた陽光を浴びながら、軽やかで透明なローヌ川の大きな流れの近くであなたの手紙を読みました――私はあなたが「実現不可能な夢」と呼ぶものを道連れに、ローヌ川に飛びこんでしまいたいと思いました。

私はまた自分の卑怯さにも苦しんでいます。私はもうあなたに手紙を書いてはいけなし、もうあなたに会ってもいけないのだと思います――私の生の深いところで発芽し、私より強いにもかかわらず、私を責めさいなみ、出口のないまま私を解体するだけの、花も咲かないこの植物は切ってしまわねばならないのでしょう。

お赦してください。私は私に手紙をくださったあなたに感謝する代わりに苦々しいことばかり言っていますね。私はあなたがあなたの知らないことまでも私から奪い取ると考えた私自身を責めているのです……。

でもあなたは、きわめて鮮明で明確な絶望が自分の中にあるとき、私たちがどんなことを考えるものなのかご存知ですよ。

私はもうこれ以上書けません。[LN, 80]

ルネのいう「実現不可能な夢」とは何なのだろう。ヴァレリーからの何らかの提案を指しているのだろうか、それとも単にルネ・タッサン・ド・モンテギュとの夢がうまくいきそうにないということなのだろうか。ところで、ヴァレリー

は同日に書かれた『カイエ』に次のように書いていた――

32年3月13日。リヨン、手紙 (Epistolas)。青ざめた陽光を浴びながら、軽やかであまりにも明るすぎる緑色のローヌ川に沿って散歩する。つらい。カモメたち。反芻と嘔み傷。歩く人間は現実を表面として見たり、構成したりすることがほとんどない。あたかも、存在するすべてのものが、くすんだ黒の上に表面的に描かれているみたいだ。彼は自分が触れたり、踏みつけたりするものからとても遠いところにいる。そんな彼に触れあう人間などいない。<sup>19)</sup>

こちらのほうには、ローヌ川に飛びこむというような過激なことは書かれていないが、その代わりに、ルネからの手紙に書かれた言葉を「反芻」し、そのたびごとに「嘔み傷」の深刻さをいやましているヴァレリーがいる。彼はもう自らを「私」とは呼ばず、3人称の「歩く人間」あるいは「彼」となって、現実の世界からも、自分の心や体からも隔たった離人症のような状態に陥っているという。

しかし、第54信で、「私はもうこれ以上書けません」と記して、いったん書くことを中断したヴァレリーは、一呼吸した後、次のように続けている――

ホテルの部屋は窓が3つある円形の部屋で、ツインベッドが置かれたアルコーヴもあります――さらに、付属の空間があって、そこは小さなアパートマンのようになっています。

あまりにも孤独を感じ、そして、洋服箆筒に付いたいくつかの大きな鏡に映るのは自分ばかりで、私は死んでしまいそうです。

私の恐るべき偶像崇拜の力全体が私の中で私自身とぶつかっていますが、それはハエがガラス窓にぶつかるのと同じことで、それ以上のものではないのでしょうか。

テーブルが持ち上がり、ドアが開き、ある心とある心が仲むつまじくなることを望んでも無駄なことなのです――無です。

これらのベッドはおぞましい。

再び同日の『カイエ』に戻れば、そこには、カールトン・ホテルの室内のデッサンが描かれている。中央に丸いテーブルが置かれ、窓も画面中央にあり、左奥にはたしかにツインベッドが描かれている〔図版2〕。ヴァレリーが1人で宿泊するにはじゅうぶんすぎる広さの部屋である。そしてヴァレリーは、円形の部屋の数枚の鏡に映る「仲むつまじくな」れる他者の姿がないまま、自分の姿がそこに反響し、増幅しあうのを夢想して窒息しそうになっている。だからこそ、アルコーヴのツインベッドは「おぞましい」のである。ヴァレリーが身を

横たえるであろうベッドの傍らのもう一方のベッドが愛するルネの身体を迎え入れることはない。ところで、ヴァレリーはルネをめぐる同じ13日の考察の中で、「懇願する魂」と題したもうひとつ別の断章を『カイエ』に書きつけていた――

人間は――高いところ、そして切り立ったところにいたなら――必然的にそこから身を投げること考えるにちがいない。それは、目の前に、なみなみと注がれたグラスや美しい液体が置かれたら、それを飲むことを不可避的に考えるのと同じこと。

こんなふうには、人間は毎瞬間ごとに、その瞬間のうぶな魂と一体となるように誘惑されている。その魂は、目にするものを欲しがり、たちまちのうちに、目の前にある物たちが要求してくるものを実行にうつす。それは懇願する魂だ。生成するもろもろの状態の神だ。

閉じられた洋服筆筒は青髭の妻を要求する。リングはイヴを要求する。私たちの中には互いに独立しあつた数多くの期待がある。<sup>20)</sup>

ヴァレリーの類推をたどるなら、絶望した人間が満々と水を湛えたローヌ川の流れを見て、そこに身を投げようと考えたり、ツインベッドを見て、そこに「仲むつまじい」2つの身体が横たわる姿を想像したりすることは、こうした「懇願する魂」のごく自然な働きだということになるのだろうか。空間を横断して届けられる、今、ここにいないルネの近況はそうした魂を「必然的」かつ「不可避的」に絶望の淵まで追い詰める。

### ムラルテングートの危機と断念

ヴァレリーはリヨンの後、アヴィニオンやマルセイユで講演し、その後、ジアン半島突端のマルティエヌ・ド・ベアグ夫人の別荘《ラ・ポリネジー》に滞在し、休息した後、ニームとモンペリエをまわって4月上旬にパリに戻ってくる。パリでのんびりしたのも束の間、ヴァレリーは5月に再び講演旅行に出発する。今度の目的地はウィーンとチューリッヒである。

ウィーンで1週間ほど過ごした後、ヴァレリーはチューリッヒに移動する。ここでの滞在先は市の迎賓館とも呼ぶべきチューリッヒ湖畔に建つ瀟洒なムラルテングートであった。そこにまたルネからの手紙が届く。その5月24日付の手紙には、ルネ・タッサン・ド・モンテギユとの関係が好転したので、自分が幸せになれるよう、ヴァレリーにも祈ってほしいという内容が書かれていたの

ではないかと推測される。「ふたりして不幸であることの幸福」が崩壊した瞬間である。第 69 信は翌 25 日のヴァレリーの返信である——

火曜日あなたの手紙を受け取りました。[……] あなたが書いてきたことは私に襲いかかりました。私は自分がどうなってしまうのか分かりません。あなたはあなたに訪れた幸せを私もいっしょに喜ぶだけの力を持つようにと要求します。私の目の前で踊っているように見えるこの手紙を私がよく理解できたとしたなら、私はあなたの言うその——幸せとかいうものを想像しなければならないということなのですね……。それを想像することがどういうことなのか、考えてもみてください！ それは……。

私には書けません。[……]

しかしながら、親愛なるお方、その方の不幸も幸福もともに私にとっては等しく敵対的で残酷であるお方、——ええ、どうかお幸せになってください。[LN, 97]

ついにヴァレリーはムラルテングートで互いの不幸の中でかろうじて保たれていた親密な共犯関係がこれ以上不可能であることを察して、ルネを断念する決心をする。それが、26 日に書かれた『カイエ』の 1 ページである——

昨夜、チューリッヒ大学でゲートに関する講演を行った。疲労困憊。NR。幸せ！  
[……]

今朝——雨が降っている。チューリッヒ湖はくすんでいて、窓を覆うほどに茂るブナやマロニエやシラカバの木々越しに湖が苦悶している様子が見て取れる。そして私はといえば、決意を固め——心の中で泣きながら、あらゆるものを破棄し、自分の頭を、その愚かしさと偶像と苦痛とともに、掃き溜め同然の外的混沌に投げ出す。

(NR ヘト変装シタ) 自分自身ニ対スル戦イヲ始メルコト。<sup>21)</sup>

上の引用文中の「幸せ」は、ルネの手紙にあったヴァレリーに祈ってほしいと願った幸せのことだろう。その「幸せ」から排除されているヴァレリーは、この言葉の前で、ペンを止め、そこで立ちつくしてしまっているかのようだ。また、最終行の「(NR ヘト変装シタ) 自分自身 (seipsum (in NR déguisé))」のくだりに関しては、いくつか解釈の可能性があるとは思いますが、たとえば、「『他者』愛は『自己』愛の変装である」<sup>22)</sup> という『カイエ』の一節が手掛かりになるだろうか。つまり、ルネの創造行為を見つめつつ、自分の体がくすぐられるような感覚を抱いたところから大きく展開し始めたヴァレリーのルネにたいする愛は、『固定観念』というルネへの思いを根底にしたような作品を生み出しはしたものの、相互の理解はいつこうに進まず、不在の影に圧倒され、精神のコ

ントロールを失ってしまう場面が多かったという確認だろうか。Néère ことルネは、ヴァレリーにとって「『未知なる一自己』のもっとも美しい発明や生と苦悩のダイヤモンド」を内に秘めた「暗黒体 (Corps Noir)」<sup>23)</sup>であったが、彼女はまた、自分の胸像を作る彼女を見つ彼が心の中で素描し、その不幸な恋による苦悩の中で完成させたナルシスの似姿だったのだ。そんな自己愛をこそ敵として戦わなければ、この苦境を脱することはできないということなのだろう。しかしヴァレリーはこれまで『『自己』愛の変装』ではない愛で他者を愛したことなどあっただろうか。Néère, NR, Noir, Narcisse……、ルネをめぐって随所に確認されるNとRの乱舞こそは、ルネとの「幸せ」から、最初から、そして永遠に遠ざけられていたヴァレリーの苦悶の痕跡なのかもしれない。そして、そうした痕跡をすべて抹消しないかぎり、自らの安定は得られないとヴァレリーは決断したと思われる。ヴァレリーの手詰まり感が伝わってくる。

これに関してもうひとつ確認しておきたい『カイエ』の断章がある。それは、先ほどの引用 21 と同じページに書かれたもので、「ムラルテングートの神々しい檜の木」と題され、デッサンが添えられている【図版 3】――

そこには、まさしく神々しい女性の姿が幹から抜け出てきて、再びそこに戻っていく様子が見て取れる。腰、腹、腋の下、そしてだんだん細くなって空まで伸びていく腕、さらに、この滑らかな樹皮のマチエール、本当に人肌のような細かな皺。銀をめっきしたような輝き。亀裂の数々。生長の力がこの象のような肌、生きた石を破裂させるということが感じられる。

ムラルテングートの庭に植えられた数多くの木々の中の本の檜に目を奪われたヴァレリーが、そこに神々しいまでの女性の姿を見たという話だが、この木を石のように削り、亀裂を作りながら造形していくのは檜の生命力である。ヴァレリーはその生命力を賛美しつつ、自分もまたその創造行為に加担して、ひとりの女性を生み出そうとしたのだろうか。ルネのように粘土や石を相手にするのではなく、生きた木を材料にする彫刻家になろうとしたのだろうか。しかし、ひとたび、「幹から抜け出てき」た女性が、「再びそこに戻っていく」というのはどういうことだろう。自らもまたピグマリオンになろうとしたヴァレリーが途中で作業を停止し、愛する女性の像を未完成のままもういちど幹の中に埋め戻したということだろうか…。ヴァレリーによるルネの断念を考える上で示唆

に富んだ断章である。

いずれにせよ、ヴァレリーの決断はそう簡単に実行に移されたわけではなかった。たしかに、ムラルテングートでの危機的状況を息絶え絶えの状態で脱したヴァレリーは、その数日後、5月末から6月初めにかけて、『ストラトニケ』のための考察のあるところで、「王」に次のように言わせていた――

『ストラトニケ』――最終場面――

王：お前が幸せになった以上、もうお前を抱くことはできない。<sup>24)</sup>

しかし、この決断はすぐに揺らいでしまう。6月15日の第71信で、ヴァレリーは次のように書いていた――

あらゆる決心は煙となって消えました……。

私はもはや火、炎、赤く燃えた燠そのものです……。

ああ、なんて哀れな男！……。彼はこれまでになく狂っています。

こんなに賢いのに、こんなに狂っているとは奇妙な話です！

そんな男にとって、あなたを両腕で抱きしめること以上に賢いものはなく、あなたのせいで悩まされる苦痛から逃れること以上に気が狂ったものはないのです。[LN, 99]

ルネと別れる決心をしても、ヴァレリーはまだルネの優しさを必要としている。こうして、あたかも何事もなかったかのように、ムラルテングートでの決心の後も、ふたりは会いつづけている。セーヴルで陶器づくりを見学したときにルネが同行したらしいこと、プーローニュの森をいっしょに散歩したことなどが『カイエ』に記されている<sup>25)</sup>。手紙からは、お互いが家族と過ごすヴァカンス地の情報をやり取りしているさまも推察される。もちろん、今後ルネがヴァレリーの期待するような愛情に応じる可能性がないことをヴァレリーが知らないはずはないが、ヴァレリーからルネとの関係を決定的に断絶しようとする動きにでることはない。それどころか、ルネへの想いが一気に押し寄せてきて、我を失いそうになることもある。

1933年3月10日、ニースのネグレスコ・ホテルに滞在中のヴァレリーはヌイイーのデュリッド通りに転居した「悪魔」ことルネに宛てて、次のような第97信を送っている――

数日の予定でここに来ています。滑稽なことに私は王様のような部屋に泊まってい

ます——2階にあるアパートマンなのですが——1泊700フランもします（サービス料抜きで!）。[…]

私はこの豪華な場所にて退屈で死にそうです。

極限的なまでに独りぼっちです。甘美なまでに怠惰で青白くピンクで青くてもろそうな海は私の悲しい目には退屈です。

この部屋にはあまりにも強烈な香水の匂いが染みこんで、住みついています。——最初その匂いはあるかなきかのレベルでしか感じられなかったのですが、——その後、自分の存在を強烈に主張してきて——苦しめるほどです。化粧台の引出しを開けると、そこから雷のように強烈な力が飛び出てきて——鼻孔を痙攣させ、力づくで肺を拡張させ、魂の中で女性のイメージではないもの——（そしてその彼方のもの）——の一切を弱体化させます。心はこの匂いとその匂いが支配するあまりにも生き生きとした素描の中に迷い込んでしまいます……。

こんな毒など私には少しも必要ではないのですが。[LN, 128]

第54信のリヨンのカールトン・ホテルのときと同じく不在の力に圧倒されたヴァレリーの姿を見ることができが、ここでは部屋に染みこんだ強烈な香水の匂いがヴァレリーの孤独感をさらに深刻なものにしている。化粧台の引出しから出てくるのは、青髭の物語にあるような先妻の死体ではなく、この部屋に以前宿泊したであろうたくさんの女性たちの香水の匂いである。ヴァレリーはルネ自身の匂いやルネのつけていた香水の匂いにはいっさい言及していないが、見知らぬ女性たちの残した匂いによって、鼻孔も肺も暴力的に襲われ、魂全体が女性的なものによって占有されている。

ヴァレリーはさらに次のように手紙を続ける——

おそらく私はあなたの芸術家としての性質に狂おしくなっているのです——あなたのおすべてにたいして私が狂おしくなっているのと同じくらいに。そして私の頭は私の両腕と同じくらいにあなたを欲しています。

私の心からいつでも蘇ってくる（renait）魅惑的な蛇さん、あなたは何通りもの咬み方で私を咬むのですよ。

でも、あなたの中には——あなたの生き方の中には、私の納得のいかないことがいくつもあります。それはあなたの仕事にそぐわないのです。

まあ、それはどうでもいいことです。

なんとここで——そしていたるところで、私は独りぼっちなのでしょう。

こんなふう独りぼっちだということは、一種の鏡なのです。恐ろしい。

今夜です。「イギリス人たちの散歩道」は私の窓の下で——あるいは、私の頭の中

で輝き、豊かに流れていきます。月が出ています——火星も、それに木星もシリウスも見えます。すばらしい光景です。2つ、3つ、信号が点滅して暗い海の絨毯を馬鹿げた驚きで楽しさせています。『マイスタージンガー』のある主題が私の喉のところまで昇ってきます。こんな風にこのテーマが昇ってくるとき、私は自分の手首を咬むのです。[LN, 129]

何度も何度も咬み傷として「蘇ってくる」、絶対に手の届かないルネの魅惑。renait と Renée, 若干音は違うにせよ、いまだルネの魅惑から解放されないヴァレリーがいる。しかし、その一方で、ヴァレリーは、「あなたの生き方の中には、私の納得のいかないことがいくつかあります」とも書いている。ルネにたいして、これまで何らかの恨みがあったにしても、それを少なくとも手紙では書かなかったヴァレリーがはじめてもらした不満である。やはりどこかでルネとの別れが近づいていることを感じ取っているのだろうか。ここで言われている『『マイスタージンガー』のある主題』とは、ザックスが若いエーファを断念する主題のことであるが、この主題を思い出すたびに、ヴァレリーは胸がつまってしまう。「自分の手首を咬む」ヴァレリー、それは、自分の魅力のなさ、能力の低下、老いを認め、ルネを断念すべき時が来ていることを自覚しているにもかかわらず、その踏ん切りのつかない自分を罰する蛇と化した姿だろうか。

ヴァレリーがルネの断念に向かって大きな一歩を踏み出すことができたのは、ムラルテングートの決断から3年近くたった1935年4月9日のことである。ヴァレリーは長文の手紙（第151信）を認め、そのほぼ最後のところで事実上の別れを通告する——

さようなら、親愛なるル=ネ、——私の石のルネ……。

[…] さようなら、ルネ。私は疲れました——泣きたい気分です——等々。[LN, 191]

しなやかにその形を変える「粘土」の比喩とともに語られていたルネはいつしか「石」の女に変身していた。しかし、そんな「冷淡で、頑として願いを聞き入れてくれない女」に向けてヴァレリーはさらに作品を残そうとしていた。それこそは、『固定観念』以上にルネの作った胸像に応える愛と知性の作品ということになるのではないだろうか。それはヴァレリーの最晩年、ジャン・ヴォワリエとの交渉を経て、『わがファウスト』として結実することになる。

## 註

- \*) 本稿は『ヴァレリー研究』第8号（日本ヴァレリー研究センター，2019年，20-33頁）に掲載された書評「Paul VALÉRY, *Lettres à Néère (1925-1938)*, édition établie, annotée et présentée par Michel JARRETY, Paris : Éditions de la Coopérative, 2017」に修正・加筆を施したものである。なお，同書からの引用にさいしては本文中に *LN* の略号とともに頁数を示す。またヴァレリーの『カイエ』からの引用は基本的には *Cahiers*, édition intégrale en fac-similé, 29 vol., Paris : CNRS, 1957-1961 から行い，*C* の略号とともに巻数と頁数を示す。
- 1) *C*, X.729.
  - 2) Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008, p. 603.
  - 3) Voir *LN*, 220.
  - 4) コペンハーゲンのアングレートール・ホテルのヘッドレターが入った便箋を使用している。
  - 5) *C*, XV.291.
  - 6) *Ibid.*, 295.
  - 7) *C*, XV.296
  - 8) *Ibid.*, 295.
  - 9) 『固定観念』では，とりわけ表面と深さをめぐる，「人間においてもっとも深いもの，それは皮膚である」（«Ce qu'il y a de plus profond dans l'homme, c'est la peau.» [Paul Valéry, *Euvres II*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1960, p. 71]）という逆説的な表現がとりわけ有名だが，この「医者」の科白に近似の表現はヴァレリーがカトリーヌ・ボッジと決定的な段階に入った1920年8月初旬の『カイエ』に書かれている——「人間においてもっとも深いもの，それはおそらくその皮膚である」（«Ce qu'il y a de plus profond dans l'homme, c'est peut-être sa peau.» [Cahier 89, 170, NAF 19295]）。
  - 10) *C*, XV.358. ただし，最初の2行は CNRS 版の『カイエ』から抹消されているので，フランス国立図書館所蔵のオリジナルのカイエ *Cahier 144*, «AQ 31» (NAF 19350) を参照しつつ補足した。
  - 11) Paul VALÉRY, *Alphabet*, édition établie, présentée et annotée par Michel JARRETY, Paris : Le Livre de Poche, 1999, p. 98.
  - 12) *Ibid.*, p. 97.
  - 13) *C*, XV.515.
  - 14) その後，『わがファウスト』の未完に終わった『リュスト』第4幕には，ジャンヌ・ロヴィトン（筆名ジャン・ヴォワリエ）宛の書簡の一部がそのまま使われようとしていた。
  - 15) *C*, XV.374.
  - 16) *LN*, 73. これは一行の音綴数もばらばらで，脚韻も踏んでいないことへの言い訳か

もしれないし、ヴァレリー特有の韜晦なのかもしれない。『テスト氏航海日誌 抄』に収められた一篇が「自我語からの翻訳」(VALÉRY, *Œuvres II, op. cit.*, p. 42)とあったのが思い出される。

- 17) VALÉRY, *Œuvres II, op. cit.*, p. 197.
- 18) 1932年2月28日の『カイエ』には«Prélude de l'Idée fixe fait pleurer.»(C, XV.540)とある。この部分の邦訳は「『固定観念』の序曲を読み直すと泣けてくる」(『ヴァレリー全集カイエ篇』第6巻, 筑摩書房, 1981年, 385頁)となっているが、これまでの考察から判断すれば、「『固定観念』の序文を読んで聞かせたためにルネを泣かせてしまった」と解することも可能なように思われる。
- 19) C, XV.558.
- 20) *Ibid.*, 558.
- 21) C, XV.644.
- 22) 引用の原文は次の通り——«l'amour de l'Autre étant un déguisement de l'amour du Même» (*ibid.*, 364).
- 23) *Ibid.*, 295.
- 24) *Ibid.*, 670.
- 25) C, XVI.77 (1932年12月10日), および *ibid.*, 165 (1933年1月末と推定される)を参照。